

キリスト教神学と新儒家

謝 扶 雅

私は十数年前、「私の感謝の神学」二文を連続書いたことがあった^①。この二文は1980年香港の道勝^②出版社が発行した『生之回味』（生の意味）の中に収録した。香港の中大崇基学院にあるひとりの神学大学院生がこの文章について、私のキリスト教思想をスイスのカール・バルトのような本体神学よりも英米的色彩の経験神学に属すと評論した^③。確かにその通りである。大体私はいつも宗教心理学観点から自分の宗教経験を述べる、ごく稀れなことしか宇宙本体観から自分のキリスト教思想を書かない。本文では、中国新儒家の宇宙哲学——特に宋代初期の程顥（明道）の動静一如説——とキリスト教神学について対比したいと思っておりますし、もしかしたら私は今空想的に著作した“動静神学”で感恩神学の不足を補うというつもりになり得るだろう。目前、大陸の中国教会では“三自愛国”の方針を堅く守り、西洋の神学体系を追求するより“自伝”で励む。本文は中国の本位繰りの促成に参考作用になれば、同労の皆様からのご指教、ご訂正があるようにと心から祈っている。

新儒家とは、原始的儒家と東西両漢経学から新発展したものを指している^④。原始儒家の前身は堯、舜時代で、更に逆溯すると、伏羲、神農、酋族部落社会から農耕社会に演進した。農耕労働人口の需要で、夫婦の調和的な対偶哲学がすでに始端を現われた。堯舜時代の“五倫”政教（孟子、父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり）の基本型は、実に男女、或いは夫婦の一倫というべきだ。このような“対になる”文化は、丁度當代英国の大歴史学者トインビーが指している：中国文化は、陰陽哲学である。陰陽は文王

著の《周易》一経の中に乾坤という。乾坤は男女（夫婦、父母）の代名詞にしか指していない。しかし、この兩字の主旨は“生”にある。周易系辭伝の作者によると、易の宇宙観は“生生”不止である。これがキリスト教神学に非常に合っている。新約聖書ではよくこういうふうに言っている：“神は永遠の神だ”。哲学上の術語で言うと“大宇宙生命”となる。

東周及び戦国時代の主要な儒家——孔子と孟子両聖人は中華民族のために“仁義道德”の教えを提出した。孔子は上代の“五倫”関係の政教方略を総括的にまとめ、そして、“人と我”関係の“仁”学説に創立した。彼自身、自ら“仁”について“夫れ仁者は、己れ立たんと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す”（論語、雍也篇）と定義した。後になって東漢時代のひとりの古今の書物の綜合家鄭玄（康成）は“仁”について“仁、は人と会ってペアとなり、人に従って二番目となる”と限定した。孟子は“義”で“仁”の不足を補って“仁義”という対になる原理を確立した。“仁”とは、人を愛することもしくはゆるしの原理，“義”は自ら重んじ自ら尊ぶことである。

西漢時代の大儒家董仲舒は、孟子の仁義人生理想を“天人合一”論に拡張した。彼が人生は元來天の神様とよく似ておると思った。これがキリスト教での世間の人々は皆神の子であるのこととよく似ている。イエスが人にお祈りの教えを始めから“我ら天の父”と教えた。そして、彼自身は神様のひとり子であり、故に、使徒ヨハネ福音書の中に“父と我は元より、一体なり”と何遍も言われた。“我は父の中に、父は我の中に”と言われた^⑥。董仲舒はただ天人合一と主張しただけで、“人は天の中にあり、天は人の中にある”とは言わなかった。しかし、西漢時代の初期に出きた《中庸》一篇（小載礼記中に初編入した）の中に始めから“性は天の命をいう”と言い、即ち、人の本性は天から施されたという意味している。故に人性を言うたびに天性を指している。人倫は天倫ともあり、人道は天道ともある。このような天人合一、しかもお互いに源（元）となることは、近代、宋代、明代五百年間の新儒家にかなりの影響を与えた。

新儒家は北宋時代初期の周敦頤（濂溪）から始めた。彼が道教と仏教の影響

を受け周易の“太極”を更に深み，“空無”の虚静を付け加えて“無極であり太極である”説を提出した。継いで、假大乘仏学の“多は一の中にあり，一は多の中にある”の“一と多は互に影響する”から“陰の中に陽があり，陽の中に陰がある”を描いた。そして，これで“乾道は男に成り，坤道は女に成る”の対極哲学を補充した。彼が《中庸》篇の中の“誠”字を取り挙げて，これを人生の理想と見なした。新儒学を“理学”とも名付けられており，理学の祖師は程顥（明道）である。“理”という言葉は周礼から始めた。孔子は言われた：“礼をこれ用うるには，和を貴しとなす。先王の道も斯を美となせり。小大に之に由らば行われざる所あればなり”（論語，学而篇）。この“和”という字は孔子の孫（子思）の頭の中に深く刻まれ，彼の作品《中庸》の中で主要の用語にもなった。そして，程明道の“動静一如”説にも強い影響を与えた。子思は言われた，“喜怒哀楽を発しないのは中という。発するから全部は節調の和である。中は天下の基本であり，和は天下に達する道である”。子思は宇宙の本体が虚静と見，しかもその演化の過程は変動的であると思った。しかし，萬變の“和”は実に不変の静体の“中”を含む。故に“動静一如説”が言えるはずだ。一方，中国仏学の主旨である，“理法界”および“事法界”の二つの次元から“道理が通ずれば，万事は通ずる”を断言することができる^⑥。理一事多，多くの事が一理の中に宿り，そして，同時に一理も多事（萬事）の中に宿っている。

19世紀中期のドイツの哲学者ヘーゲルにおいては，はっきりと“即自”的神は静態的宇宙の本身であり，“対自”の神は宇宙動態的な神の作為である。両者は二にして一で，また一にして二となる。

新儒家の人の重要な人物は明代中期の王守仁（陽明）である。彼が程明道の動静一如説を知行合一説に衍化した——即ち，行は知の始めで，知は行の成就である。王陽明的学問方法はもっとも“大学”の中の“事物の道理をきわめて，自己の知識を高める”に依存していた。最初，彼は自家門前の竹下で考え失敗した後，仏教に転じ，そして，儒に戻る。王陽明の晩年は貴陽におり，弟子達に天橋四句偈の中で：“無善無悪とは心の形であり，有善有悪とは心の動

の動きである。善悪がわかるのは良知であり、悪を去って善をなすのは格物である”と教えた。前の二句は佛家の“虚無”と“実有”の影響を受けたとはっきり知ることができる。しかし、空無の静体は原来萬有の変動の中に宿り、そして、萬有の動態の中にも空無の静態の中に宿る。佛家がよく言われるように“波が起こるのはただ水があるからで、水が動かないのは波が起らないからである”。華嚴宗の始祖、法蔵は武則天帝の金輪殿に手足振りして言われた：獅子の全身は、手足頭尾と毛髪であるが、それは全体ではない。しかし“一つの毛でも獅子の全体を感じることができる”獅子の全体はまた一つの毛の中にある。王陽明が言われた良知とは仏教で言われている阿頼耶識のほかならぬ。無善無悪は空無の“静”体で、善悪は“動”変である。世の中の善悪は、豊かなものを用いる神である。また、善悪を知り善悪を去ることはイエス・キリストと弟子達が教会を訪ねる時に、常に努力前進し、父のみ旨が天で行われるように、地上に行われるのことによく類似していて天国降臨を実現する。これが王陽明が強調している良知である。或いは、これが中国に受肉したイエス・キリストであろうと言う。

“集理学之大成”と呼ばれている、南宋時代の朱熹（晦庵）は理気二次元論を創説した。しかし、“道理と教えの原則は六合である。集める原則は必密である”を言っている。晦庵は四書五経を排列し、注解し、人科挙の人の必修科目として取り挙げた。この制度が清代の滅亡まで行われて来た。朱熹、約と同時期に特に目立っている陸九淵（象山）は“心は理であり、心の外には理はない”と高唱して、ついに新儒家の中の心学を開けた。彼が“東海にも聖人が出現し、心も同じ、理も同じである。西海にも聖人が出現し、その心も同じ、その理も同じである：南海にも有り……北海にも有り……その理は同じである”と言われたことがあった。当代の存在主義者の一員、ドイツのハイデッガーの《世界哲學家》という二冊の書物には、まず、孔子、釋迦、ソクラテス、イエス・キリスト四人を最高の人物と見なして四人について評価論説し、客観的しかも精詳であった。我々は、中世紀に仏教の大乗經典で中国固有の學術文明を豊かさせようと受け取ったならば、今日もキリスト教歴代神学思潮の精華を採

用して、中国教会に貢献しようとして、そして、中華本色化福音を自伝することがごく当たり前なことではないだろうか。

(『金陵神学誌』1987年9月、李 秀雲訳)

①1977. 6. 12. 香港《火柱》第67期

②訂正——道聲

③董芳苑『基督教思想史導論』p. 372

④謝扶雅の新儒家とは理学（程朱理学と陸王心学），道学（宋明儒家哲学思想）を指す。

⑤参考ヨハネによる福音書10：30「わたしと父とは一つである」10：28「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」。

⑥謝扶雅『中庸與道理』p. 115